

3 環境研究

野生動物を資源としてとらえて、 持続的に利用する

岐阜大学 社会システム経営学環
准教授

もりべ じゅんじ
森部 絢嗣

「野生動物」と聞くと、絶滅の危機や保護などの言葉が思い浮かびます。一方でシカやイノシシなどは農作物被害を発生させるということから駆除しています。ただそんなシカやイノシシも肉にすればとても美味しく、資源としての価値はあります。

野生動物を資源として捉えるということは、野生動物から何かしらの価値を見つけることでもあります。肉として食べるという直接的に利用する価値だけでなく、野生動物を見て「美しい」と感じたり、「面白い」と思ったり、人間の感性や知的欲求を満たすこともそこに価値が発生しています。つまり、野生動物と関わることで何かしらの価値が生じ、資源として利用しているのです。

人は自分自身が利用することによって、資源意識が発生し、さらにその資源を持続的に利用しようとしめます。持続的に利用するためには、根絶しないように工夫をし始めます。例えば、鰻を食べ続けたいために、ウナギの生態や技術開発の研究が発展します。水産資源のみならず、天然資源の多くが持続的利用を図るために、探索技術や生産技術などが進められています。

野生動物を保護することには、大変な労力と資金を要します。それは一部の人のみではなかなか継続しません。しかし、多くの人に資源意識を醸成させられれば、残そうという気になります。それは「カッコいいから」「可愛いから」とい

う理由でも構いません。パンダやホッキョクグマ、ネコ科動物などには多くのファンがあり、保護活動や調査研究が行われています。一方でそれらよりも絶滅の恐れが高い「地味な動物（目立たない動物）」は、身近に生息していても特に知られることも調査されることもなく、生息地が破壊され、数を減らしています。そんな動物も誰かが魅力（価値）を感じれば、それを残そうという力学が発生します。無関心の人に対して、いかに関心をもってもらうか、そのためには野生動物の基礎研究によって、「おもしろさ」を発見することが大事になってきます。

野生動物を資源として利用し続けるためには、多様な生息環境が必要になってきます。そのことは生態系全体を維持することとなり、野生動物だけでなくさまざまな生態系サービスを享受できることに繋がります。

人が野生動物とつきあっていくためには、多様な「資源意識」を基盤として、考え方の転換が必要だと考えています。

研究テーマ 野生動物 × ○○ = おもしろい

野生動物

資源



野生動物資源学の概念図



世界最小の哺乳類のひとつであるチビトガリネズミ。体重は約2g(1円玉2枚)程度。こんな小さな生き物が寒い北海道で生き延びている!



シカ肉のロースト。柔らかく旨味があり、とても美味しい

森部先生にお話を伺いました



Q 絶滅の恐れがより高い「地味な動物」には具体的にどんな動物がいますか、また、研究を通して見つけたその動物の面白いエピソードはありますか。

A トガリネズミという動物がいます。この動物は、世界最小の哺乳類の仲間です。トガリネズミの面白いエピソードとして、捕獲方法が挙げられます。トガリネズミはコップを地中に設置し、落とし穴式で捕獲します。1つのコップで一日に最高7匹を捕獲したこともあります。

Q 地味な動物に対して多くの人に魅力を感じてもらうにはどのような方法がありますか。

A その動物を研究している研究者が努力をして面白さを発信していくことが必要です。動物園や博物館などの展示施設の発信、新聞やテレビ等のマスメディアの活用、一般の方への情報発信が挙げられます。しかし、情報が広まりすぎるとその動物に悪影響が出ることもあるので、それを防ぐための線引きが必要です。

Q 「カッコいいから」だけではお金にならないと思うのですが、どのようにしてお金になる資源として意識されるようにしていくのでしょうか。

A ペット産業や動物園、博物館などの施設、フィギュア製品などが例として挙げられます。動物園などの入館料や、グッズ化を行うことでの売り上げが生まれるので、

「カッコいい」は商品になるのです。一方で高価格化や熱狂的になりすぎると違法採集につながることもあるため、認知度が上がることによるリスクもあります。

Q シカやイノシシなどの肉はおいしく食べることができるのに資源として利用されないのは、私たちの意識の問題の他にも課題があるのでしょうか。

A 資源としての認識が広まっていないのに加え、狩猟に年齢制限があったり、許可が必要であったりするなど、そもそも広まりにくい構造があるため、これらの緩和が必要だと思います。また、獲る、止めさし、解体、保管など手順の複雑さもあります。人々にとって敷居が下がれば資源としての利用が広がっていくのではと思います。

Q 家畜動物と違い、野生動物は安定した供給が難しいですが、ジビエ料理など野生動物の需要が増えることによって著しく頭数が減る可能性はありますか。

A 可能性はあります。過去には食料利用などによる乱獲で絶滅した哺乳類もいます。日本でも明治以降、さまざまな野生動物が乱獲され、数を減らしました。東北地方のニホンジカは一部の地域を残して絶滅し、エゾジカも一時、禁猟になるなど保護政策が行われてきました。現在、狩猟できる野生鳥獣のリストがありますが、生息数が減少すると、このリストから外されることもあります。

インタビューした学生の感想

森部先生のお話から、とても研究を楽しんでいらっしゃる様子が伝わってきました。研究へのモチベーションを保つには、やはり自分が好きなことであることが大切だと感じます。資源としての野生動物の利用について、今までジビエに関しては食べ物としての興味しかありませんでしたが、害獣とし

て扱われる例もあれば、乱獲によって保護が必要になるケースもあることなどを知り、勉強になりました。また、森部先生がさまざまな動物のお肉を食べたことがあるというお話はうらやましいと思ってしまいました。ジビエに対する見方が変わりましたが、今まで以上に楽しめそうです。

後列左から/森部絢嗣先生

猪子順子

(名古屋大学生命農学研究科博士後期課程1年)

上井ゆり子(岐阜大学応用生物科学部2年)

清田暖乃(岐阜大学応用生物科学部2年)

前列左から/片山義章(岐阜大学工学部4年)

柴山晴香(岐阜大学地域科学部3年)

加賀貴美子(岐阜大学工学部4年)

原田瑞希(岐阜大学工学部4年)

